

北海道新聞(令和7年12月4日)

北海道新聞

2025年(令和7年)12月4日(木曜日)

特集 24

第44回全国中学生人権作文コンテスト(法務省、全国人権擁護委員会連合会主催)の各地方大会が行われ、北海道内では254校から6488作品が寄せられた。札幌法務局と旭川、函館、釧路の地方法務局の管内ごとに審査し、それぞれ1作品、計4作品が最優秀賞(法務局長賞)に選ばれた。学校生活や家庭での出来事などを基に、人権や社会の問題に向き合った最優秀賞4作品を紹介する。

中学生人権作文コンテスト 道内最優秀4作品

函館地方法務局長賞 北海道函館聾学校2年 福井 梶馬

ぼくは聴学校に通っています。小さい頃、家の近くの公園で遊んでいる子どもたちに、「一緒に遊ぼう。」と声をかけてよく遊んでいました。ときには、中学生や高校生そして大人も遊ぶことがあります。それが当たり前にありました。ぼくは両耳に補聴器をつけていますが、それでハサにされたり無視されたりすることは一度もありませんでした。それが当たり前だと思っていました。

そんなある日、「聴の形」という映画を見ました。主人公は聴覚に障がいがあり、あまりしゃべることができない女の子で、その子をいじめる男の子との様子が描かれた学園アニメです。ぼくは、「聴覚に障がいがあり、話せないだけといじめられるのだろうか?」と正直驚きました。「でも、アニメだけの話、現実にはありえないのでは?」と思いつらいろい調べてみると、予想に反して、子どもだけでなく社会人を含む大人もいじめられる事件があるということが分かりました。他の人と比べて能力が低いから当たり前だと思われ、給料を下がられたりパフハラを受けたりしたことがあると書かれています。

コンテンツの力

した。ぼくの当たり前は、社会の当たり前とは違っていたのです。そのとおり何か変な問題がわいてきました。「大人の社会もいじめられることがあるというのに、ぼくと一緒に遊んでくれた人たちは、どうしてぼくをバカにしなかったのだろう?」もちろん一緒に遊んでくれた人は、ぼくが想像だからという理由があるのかもしれません。しかし、ぼくが考える一番の理由は、「聴の形」という映画によって、聴がいを持つているからという理由で、いじめていた人たちに尋ねてみると、「映画の名前は忘れたけど、そういう内容の映画があったのは覚えてる。」と答えた人がほとんどでした。そのために、映画やアニメによって、障がい者と同じ人間だという尊重を持つようになったようですね。この尊重という気持ちが、映画やアニメによって、相手に傷つけられた過去があつたとしても、もう一度向き合ふ勇気があれば、人とは人間でありたいし、これからも含めて受け入れるという意味もあるのかなど考えるようになりました。そして、いじ

ありのままの相手に敬意を持つ、「尊重する」という意味で、だれかと比べて秀でている人を敬う気持ちとは違うということでした。

これからぼくががまることを考えたとき、アニメやマンガなどの「ファンタジー」の力になり、今度は女の子を使いつけて、リスペクトといじめていた男の子が周りにいる気持ちを誰もがもてるようになるのではないかと思う。そして、この二人は高校で再会し、昔の出来事を許しました。「許す」ということは、ただ過去をなかつたことに対するものではなく、お互いの痛みを本当に理解しようとすることなのだと感じました。

この場面を改めて考えてみます。実際、「聴の形」はファンタジーですが、このようにも親しみやすいものです。そのため、学校の授業でこのようないい處を持つて、うな作品が取り上げられることが多いかもしれません。言葉でできないことを、子供のうちから相手に敬意を払う、尊重するという気持ちが育てられるかもしれません。また、大人になってからでも映画やマンガを通して忘れかけた大切な気持ちを思い出さなければなりません。また、コンテンツには、言葉で直接伝えるよりも心に残るものがある

この物語を通して、たとえこの物語を通して、たとえ自分がどんなことを行動に移すことができる人が増えてほしいとができるので、たとえ誰かがいる人には、心つなぎがあると思います。そして、ぼくは願います。そして、ぼく自身も誰にでも優しくできることになります。その人の過去ができない人間でありたいし、これから出会う人も聴がいがある人に関係なく同じように接していくたいと思います。